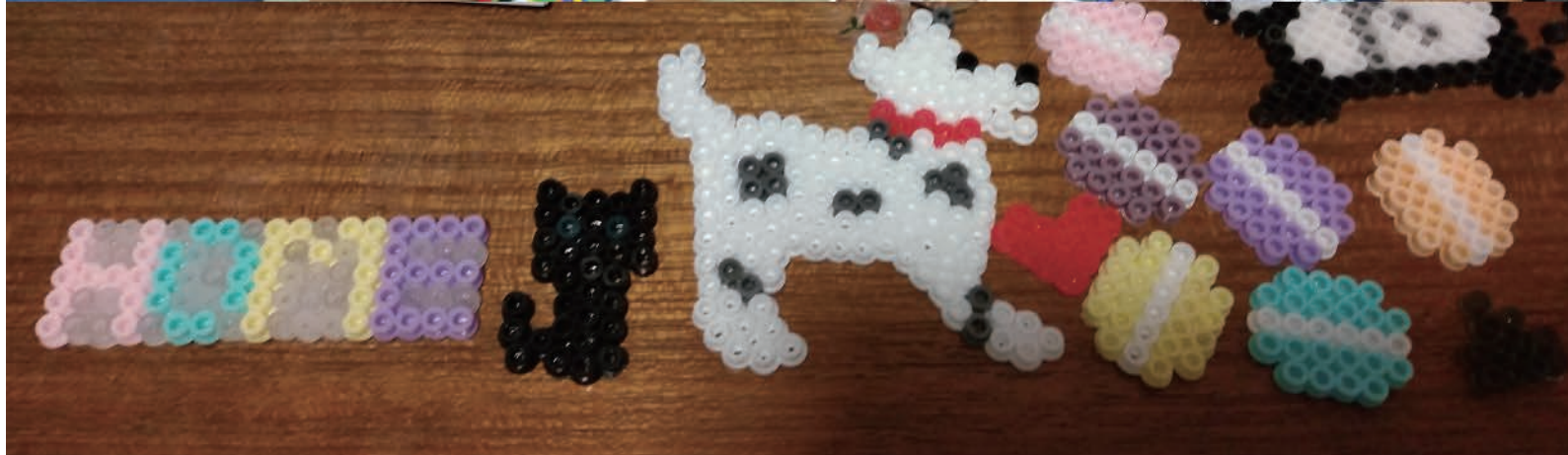


2022年度報告書
東京都豊島区における
「子ども第三の居場所」
コミュニティモデルの運営(1年目)



認定NPO法人
豊島子ども
WAKUWAKU
ネットワーク



目次

03 はじめに

04 WAKUWAKUホームとは

05 利用者数及び、内訳

06 WAKUWAKUホームのスタッフより

07 A君のこと

08 WAKUWAKUホームギャラリー

10 WAKUWAKUホームについて、利用する子どもたちへのアンケート

12 イベント報告

15 おわりに

はじめに

子どもは住む家を選べない。

そして、自分の生まれ育った家がフツーだと思って育つ。

「虐待」というワードは、子ども本人にはピンとこないことが多い。

周りのおとなには、虐待を発見したら通報をと、児童相談所が呼びかける。

しかし、子どもは、学校で「虐待とはどういうことか」を覚えてもらうことはない。

親の方も虐待しているつもりではないことも多々ある。

本来は、勉強ができなくても、約束が守れなくても、子どもは愛されるべき存在である。しかし、中にはそれが許せない親がいる。叱るではすまず、虐待といえるところまでエスカレートしてしまう。

それでも、子どもは親が好きだ。愛されたいと願っている。見捨てられたくないと思っている。

そんな子どもたちには第二の家が必要だ。逃げ場が必要だ。自分の家と第二の家を行ったり来たりしながら育つことができたなら、違う価値観を知り、自己肯定感が高まるだろう。

すべての子どもに無条件の肯定的関心を。

そんな“おせっかい”をしてくれる家を増やしたい。



WAKUWAKUホーム担当 天野敬子

※本事業は、日本財団から助成を受けて運営しています。



WAKUWAKUホームとは

宿泊機能をもつ子どもの居場所。利用料は無料である。貧困、疾病、障害、その他さまざまな理由から養育困難に陥る家族が地域に少なくない。市町村の対応窓口においても、児童相談所においても、全国的に児童虐待相談件数は増加の一途をたどっている。対応件数が増えてくると、重篤なケースを優先せざるを得なくなり、予防的介入はしにくくなる。

一方で、調子の悪い時にちょっと支えてくれる人がいれば、ちょっと預かってくれるところがあれば、危機を乗り越えていける家族もある。子どもを住み慣れた地域から引き離すことなく、安全に、地域で見守り育てていくために、地域住民にできることを提供するのがWAKUWAKUホームである。地域住民主体のNPOが、すべての子どものwellbeingをめざして、支援機関と連携しながら、貧困・虐待の連鎖を断つために活動している。

宿泊機能

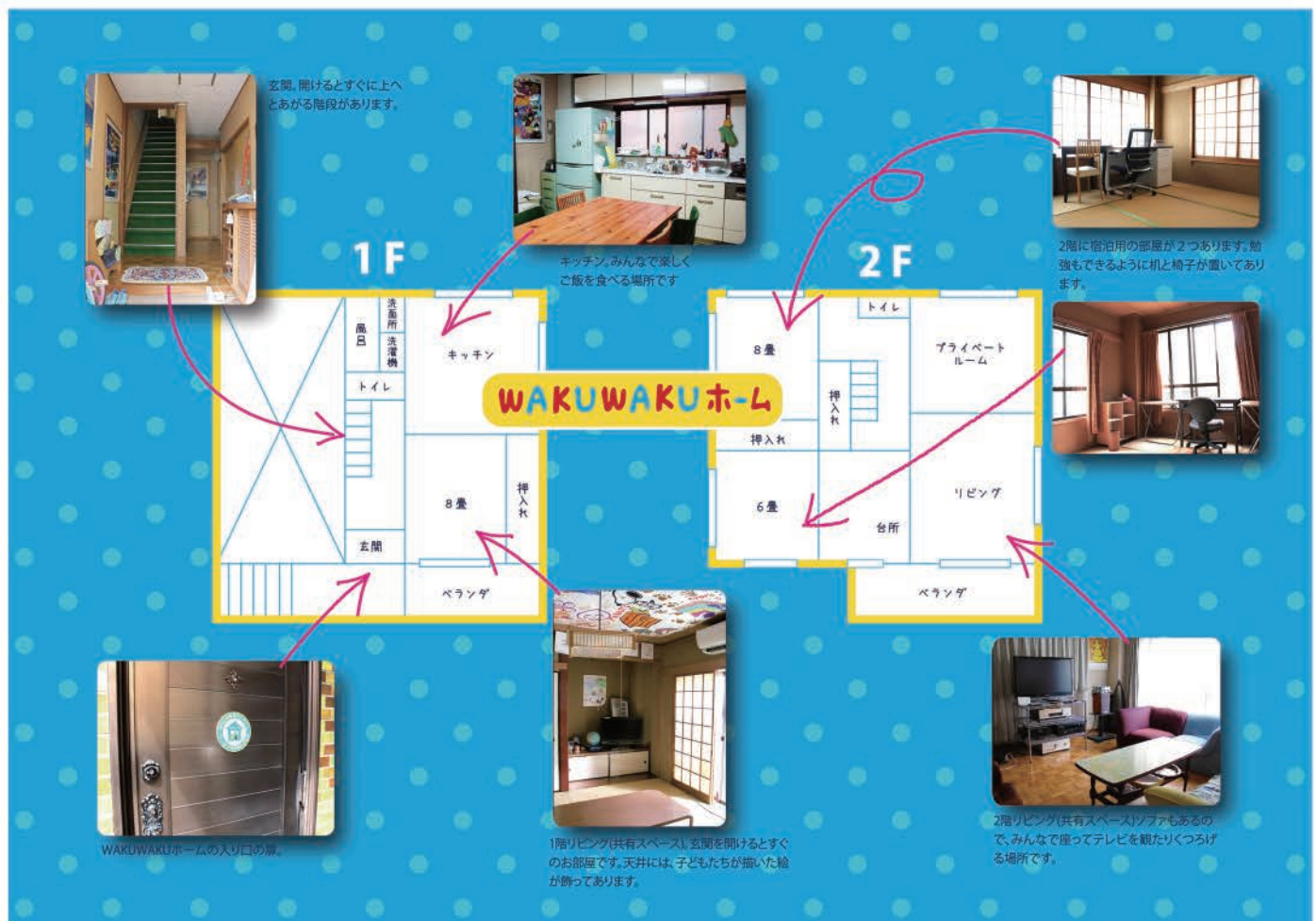
急な出張、緊急入院、今日は鬱で動けない、そんなさまざまな保護者の事情に応じて、柔軟に宿泊対応をしている。家に帰りたくないやってくる子どももいれば、子どもと距離をとりたいという親もいる。必ず保護者の了承のもとにお預かりしている。

居場所機能

火曜日から土曜日までは、ホームをオープンにしている、地域の子どもたちが遊びに来る。サポートしてくれる学生ボランティアや地域のボランティアさんがいる。

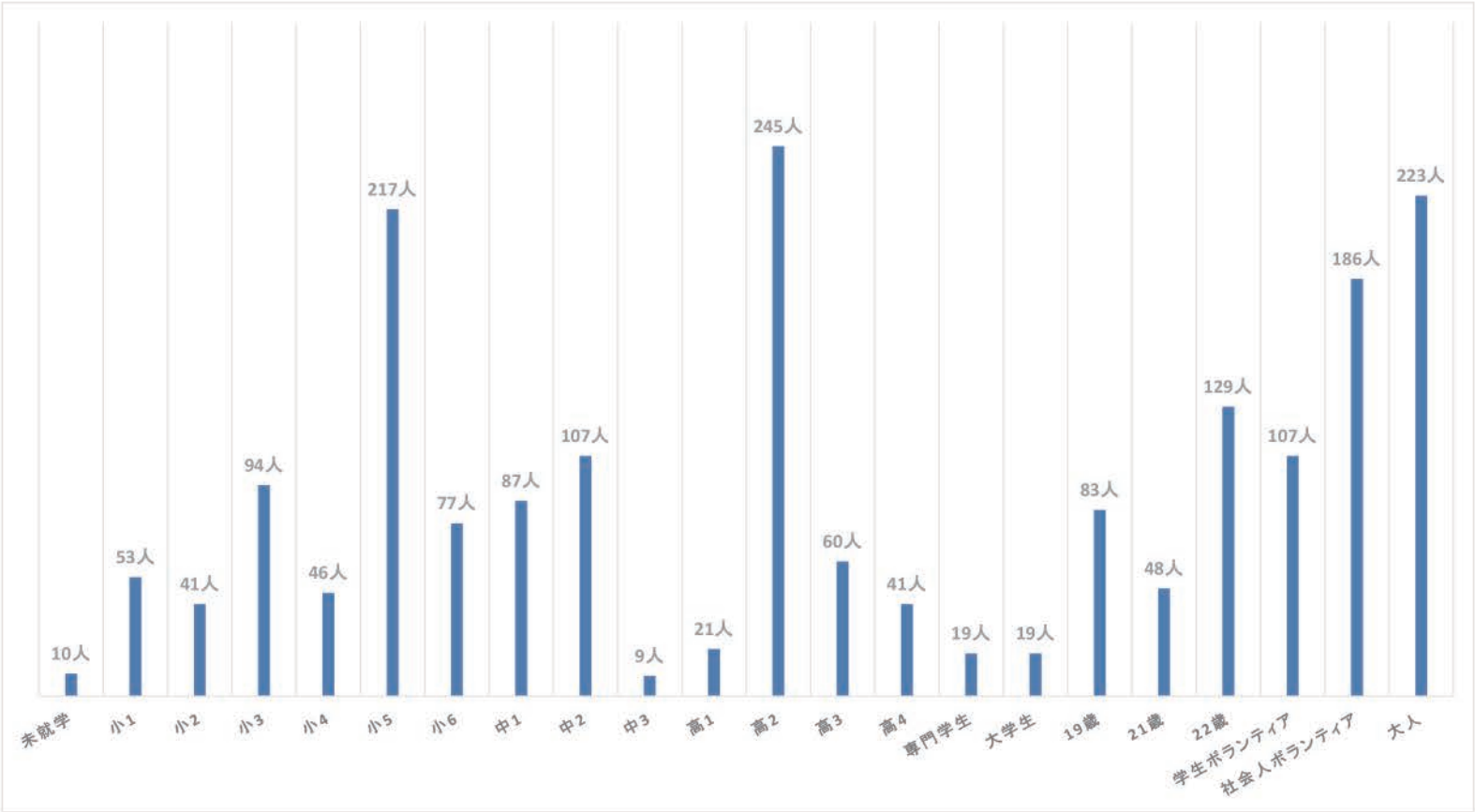
相談機能

子どもと保護者の相談に随時応じている。



利用者数及び、内訳

年間利用者数(宿泊者数の参加人数を除く) 延べ 1922人



月別宿泊利用人数

延べ 384泊

4月	5月	6月	7月	8月	9月
4人	5人	3人	7人	7人	3人
9泊	7泊	25泊	37泊	63泊	38泊
10月	11月	12月	1月	2月	3月
4人	3人	4人	3人	1人	2人
34泊	35泊	35泊	41泊	28泊	32泊

WAKUWAKUホームで行っているグループ活動

シンママおしゃべり会(奇数月の第二日曜日)

シングルマザーさんが集まって、気楽におしゃべりをしています。シンママ同士だからこそ共感できることがたくさんあります。毎回4～5名程参加。

不登校の親の会(偶数月の第二日曜日)

共通の悩みをもつ者どうしなので、共感的受容的にお互いの話を聴くことができ、エンパワメントされて帰っていけます。毎回4～5名程参加。

WAKUWAKUホームのスタッフより

石川 歩(火、水、木曜 勤務)

この春まで、3年向き合った子どもたちが引っ越しに伴いホームを離れた。

“めんどくさい” “つまんない” “暇”...といつもぼやいていた子が“今日はこれがしたいからすぐ宿題終わらせる!”と、
どんどんやりたいことが出てきてずっとやりたいことに打ち込むようになった。

自分の感情を言葉にできず、どうしていいかわからず、ぎゅっと唇をかんでもがいていた子が気持ちを言葉にして伝え、
“これが嫌だった”、“でもこうしてほしかった”と子どもどうし言い合えるようになった。

子どもたちと向き合う日々は1日1日、

ご飯をつくって一緒に食べる、勉強をサポートする、外で遊ぶ、

そんな何気ない日常の暮らしを重ねながら、正解もマニュアルもない中で子どもたちが何を感じているのか、どうありたいのか。

“めんどくさい”の後ろにある気持ちに、確かにそこにあるひとりひとりの小さな意思に耳を澄ます。

“あなたは どうしたい?”をいろんな形で問いかけ、小さな小さな意思を積み重ねていく。

ひとりひとりが自分を生きていくつよさ、力を持っていると信じながら

同時にただ全部”そのまま”ではなく、そばに生きる大人として

子どもたちへの願いを重ねていく。

時に子どもがみている世界の豊かさに感動し、

時に寄り添いながら気持ちを聞き、

時におかしいことをおかしいと本気で叱り、

時に全力で一緒に走り、遊ぶ。

そんな日々の小さな小さな関わりの積み重ねの先に、

ふと振り返って気づくひとりひとりの成長ほど嬉しいものはない

それをボランティアさんや親御さん、

何より子どもたち自身と分かち合える幸せをかみしめる。



どうか子どもたちひとりひとりが、これからも自分を生きていけますように。

私たちにできることを、問い続けていきたい。

石平 晃子(金曜 勤務)

「居場所」というところに関わるのは、何年ぶりだろうか。

お金を払わずに、何かを課せられることなく、ただ居られる安全な場所って意外とないものだ。公園のベンチは競争率が高いし夜は危ない。図書館ではおしゃべりできない。家は、、課せられること、背負っちゃうことが少なからずある。

私がホームに入る日は基本的に中学生以上の子が来る日で、これといって特に何するでもないけど、絶対にあるのはご飯だ。

行けば必ず誰かいてウェルカムで、ご飯がある。

独身の頃、大家族の友達の家でたまにちゃっかり夕飯を頂いたことを思い出す。

今来ている子達の、このシンプルな心地よさにくるまれる時間くらいは、どうか守られてほしい。“大人の都合”からの解放区でありたいと思う。

パイナップルをむくとパイナップルの種を探す小学生たちが、ずっと来られますように。



坂本 竜作(土曜 勤務)

変化し続ける楽しい居場所として、ホームに関わる日を日々心待ちしています。

ホームの皆とこんな話をしようかな、こんなことをしようかなと楽しく考えるのですが、想定した通りということはなく、大体がその場のノリや流れで決まっていきます。その変化が心地よく、人と人の生ものの交流は楽しいと感じます。

交流も一方通行ではなく、子どもたちから料理を教えてもらったり、一緒に作ったり、米の研ぎ方から教えることもあったりと、多様です。

この相互に作用しあって多様な楽しい時間であることを、子どもたちも同様に感じてほしいですし、もっとそんな場所が増えることや、さらに担い手が増えることを願って日々活動しています。



A君のこと

A君がWAKUWAKUに関わるようになったのは、保育園か小学校1年生の頃、プレーパークが最初だそうです。その頃のプレーパークは今の場所ではなく、広い野原にありました。大きな木が一本あって、木登りをしたりして楽しかったと言っています。そこで、おせっかいオバサンことWAKUWAKU代表の栗林さんに出会ったそうです。

数年後、お姉ちゃんが勉強を教えてもらうということで一緒に池袋WAKUWAKU勉強会に参加するようになりました。勉強会で勉強をした記憶はなく、いろんな子どもや学生さんたちと遊べておもしろかったと言います。

その後、A君の家の近くに、池袋こども食堂ができて、料理のお手伝いをするようになります。子ども食堂のオバサンたちにかわいがってもらいました。

中学2年生のときに、WAKUWAKUホームで実施したパソコンを使ったゲームづくり教室に参加したのが、ホームに来るようになったきっかけです。そこからレギュラーメンバーとして毎回やって来ました。WAKUWAKUホームで印象に残っていることは、焼肉を焼いてみんなで食べたことだそうです。豪華な牛肉をご寄付でいただき、A君はホットプレートでみんなの分もひたすらお肉を焼いてくれました。いつもみんなでワイワイご飯を食べているのですが、この日は特に楽しかったようです。

高校生の頃、A君は「学校にいる自分とホームにいる自分は全然ちがうんだ・・・」とつぶやいていたことがあります。改めてその心は?と聞くと、「ホームはいろんな年齢の子がいて、おもしろい、、家とも違って、素のままの自分でいられる・・・」と応えてくれました。私はこの言葉を聞いたときに、涙が出そうなほどうれしかったです。20数年、居場所づくりをやってきて、安心していられる居場所、ありのままの自分でいられる場所をめざしてきました。WAKUWAKUホームという居場所を運営して丸6年が過ぎました。そこにずっと来てくれていた子が「素のままの自分でいられる」と表現してくれたのです。

A君は、昨年3月に高校を卒業し、就職をしました。高校で食材の扱い方について学び、寮に入り割烹の厨房で働くようになりました。そして、今は、お休みの日に、ホームに来てボランティアとして料理を作ってくれます。見事な「おせっかえる」に育ってくれました。A君のような「おせっかえる」がこれからも出現してくれることでしょう。



OSEKKAERU

※おせっかえる・・・WAKUWAKUのロゴはおせっかえるです。当時小学6年生の女の子が描いた原画を元にしています。WAKUWAKUではおせっかいを推奨しています。おせっかいをされた子はおとなになって、おせっかいを返すので、「おせっかえる」になります。口元に子ども食堂のご飯粒。頭からはおせっかいの芽が出ています。

みんなで、いろんな遊び!!

子どもたちが集まれば、いろんな遊びを考えて大盛り上がり



クリスマス🎄や節分👹

季節ごとの行事もみんなで楽しめます!!



スイーツ作りやお絵描き

ゆうさん(天野:夫)と一緒にホームの天井に貼る絵をお絵描きしたりスイーツを作ったりしました♪



勉強したり、
工作したり
ゲームしたり



料理を食べたり、
作ったり、片づけたり
誕生日を祝ったり



それぞれが、
自由に過ごせる居場所

火、木は、主に小学生が利用し宿題や工作
ボードゲームなどをして遊び、
水、金、土は主に中高生が利用し、TVゲー
ムや勉強などをして自由に過ごしています。
どちらも一緒に夕食を食べて、宿泊する子
以外の小学生は20時まで、中高生は21時
まで利用可能です。



©WAKUWAKU ホームはあなたにとってどんなところですか？

学校や学童とは別で、根柢なく家に近いから年齢の違ふ人とも
一緒に勉強して遊んで飯を食ふ様子、お泊り会 みたいで賑やかで
安心できる場所だからと思う。私自身も同様に1年経って
いるけれど、ずっとここにいるから生活は満足出来ている、
人と人との繋がりやとても温かいと思う。

©WAKUWAKU ホームで印象に残っていることは何ですか？

ご飯の後にみんなが公園に行って鬼ごっこをして楽しんでいる。
私は運動が苦手なのでそれに参加しませんが、年齢や児童・スタッフ、
大人子供関係なく全員が楽しんでいる姿は誰にでも家の外に安心して
暮らすことができる場所だからだなと感じています。参加できると見ている
だけで微笑ましい光景です。

学生ボランティア



©WAKUWAKU ホームはあなたにとってどんなところですか？

おまのさんかいつもやさしい

小2

©WAKUWAKU ホームで印象に残っていることは何ですか？

ともだちが 東長崎にひっこせか
なした。

※個人名の記載があったので修正しています





オープニングではシャンテの皆さまがリコーダー演奏をおこない、会場がなごみました。

2023年2月、ようやく豊島区に児童相談所が開設されます。

それに先立ち、去る9月4日、IKE・Bizにて、

- ・児童養護施設「子供の家」施設長：早川悟司氏
 - ・NPO法人特別養子縁組支援グミの会サポート理事長：安藤莖子氏
 - ・豊島区子ども家庭部児童相談所設置準備担当課長：小林拓氏
 - ・宿泊機能を持つ子どもの居場所「WAKUWAKUホーム」：天野敬子氏
- こちらの4名によるシンポジウムを行いました。

急な告知にも関わらず52名の方がご参加くださり、地域の人に関心を持ち、行政、市民がつながりながら子どもの成長を見守ろうという気運の高まりを感じました。

子どもの最善の利益をめざして連携していきたいと思います。



参加された方からの感想

○困ったら支援するのではなく、困らないように支援するという早川さんの言葉が印象的でした。豊島区児相の親支援に今後期待します。

○世の中がこんなおせっかいにあふれたら、子どもたち(多分うるせーとか言いながら)どんなに幸せでしょう。また、子育てする親御さんたちもどんなに安心でしょう。

○こどもショートステイは本当に助かると思います。DVで逃げている母子などは社会資源とつながることも恐れています。どのようなアプローチをしたらよいか悩みます。最近ペットと一緒ににげたいというニーズがあります。ペット可のシェルターがあるとよいのになあと思います。

○子どもに関する仕事をしております。子どもを守るために、まずスタッフが地域資源を知り、スタッフが各資源とつながる必要があると思いました。また早川さまのお話に「早期に強いられる自立」とありましたが、私が所属している仕事場でも日々感じていることでした。子どもが「自分のタイミングで社会に出る」ためにどのようなサポートが出来るのか、子どもに寄り添いながら一緒に未来に向かって歩んでいきたいと思っています。

シンポジウム

子どもを通してつながるまちに

2022年9月4日(日) 14:00～16:00

地域の子どもを地域で見守り育てるために ～WAKUWAKUホームの実践より～

認定NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク
事務局長 天野敬子(精神保健福祉士)

豊島子どもWAKUWAKUネットワーク 地域を変える/子どもが変わる/未来を変える

「子どもの貧困」をテーマに地域の子どもを地域で見守り育てることをコンセプトとして活動する地域住民主体のNPOである。

- ・遊びサポート・・・池袋本町プレーパーク
- ・学びサポート・・・無料学習支援「池袋WAKUWAKU勉強会」
- ・暮らしサポート・・・「椎名町子ども食堂」「池袋子ども食堂」
「ほんちよこ食堂」
「ホームスタート」「WAKUWAKUホーム」
「としまフードサポートPROJECT」

地域の子どもを地域で見守るための主な取り組み



居場所の点在化

地域と子どもがつながる場

孤立しがちな家庭が地域とつながる場

地域の交流拠点としての可能性

WAKUWAKUホーム

2017年4月～

- 宿泊支援:子どもが泊まれる場所
- 居場所の提供:学習支援、遊びの支援、食の支援
火・木 小学生中心 水・金・土 中高生中心
- 相談支援

地域の子どもを地域で見守り育てるために一時的にあずかれる場所が必要

※日本財団「子ども第三の居場所」の助成事業です。



延べ2002人

4月	5月	6月	7月	8月	9月
4人	6人	3人	3人	4人	5人
(10泊)	(10泊)	(23泊)	(36泊)	(45泊)	(36泊)
10月	11月	12月	1月	2月	3月
3人	2人	1人	1人	1人	4人
(4泊)	(2泊)	(7泊)	(2泊)	(1泊)	(34泊)

3

9

- D

11

2

おわりに

WAKUWAKUホームに泊まった小学3年生の女の子が、「白い紙ちょーだい」と言いました。「これでいい?」と渡した紙に彼女がもくもくと描き始めたのがこのマンガです。まるちゃんはオリジナルキャラクターだといい、紙が足りないと下にまた紙を付け足して、延々と描いてくれました。次々とアイデアがあふれてくるようで、でもテーマはただひとつ「天野さんは何才か?」このマンガは私の宝物です。大事にしようと思っています。

ほとんど休まず毎火曜日にボランティアに来てくださった学生のBさんが、ホームを去っていきました。4月からは社会人です。「毎週、毎週、分からなかった問題ができるようになったり、九九を覚えていったり、子どもたちの成長がとってもうれしかった」と振り返ってくれました。コミットしてくださる学生さんたちは、子どもへの声かけが上手で、忍耐強く寄り添ってくださいます。こちらの方が子どもに対してカリカリきて、学生さんを見習わなくちゃと思うことが多々あります。

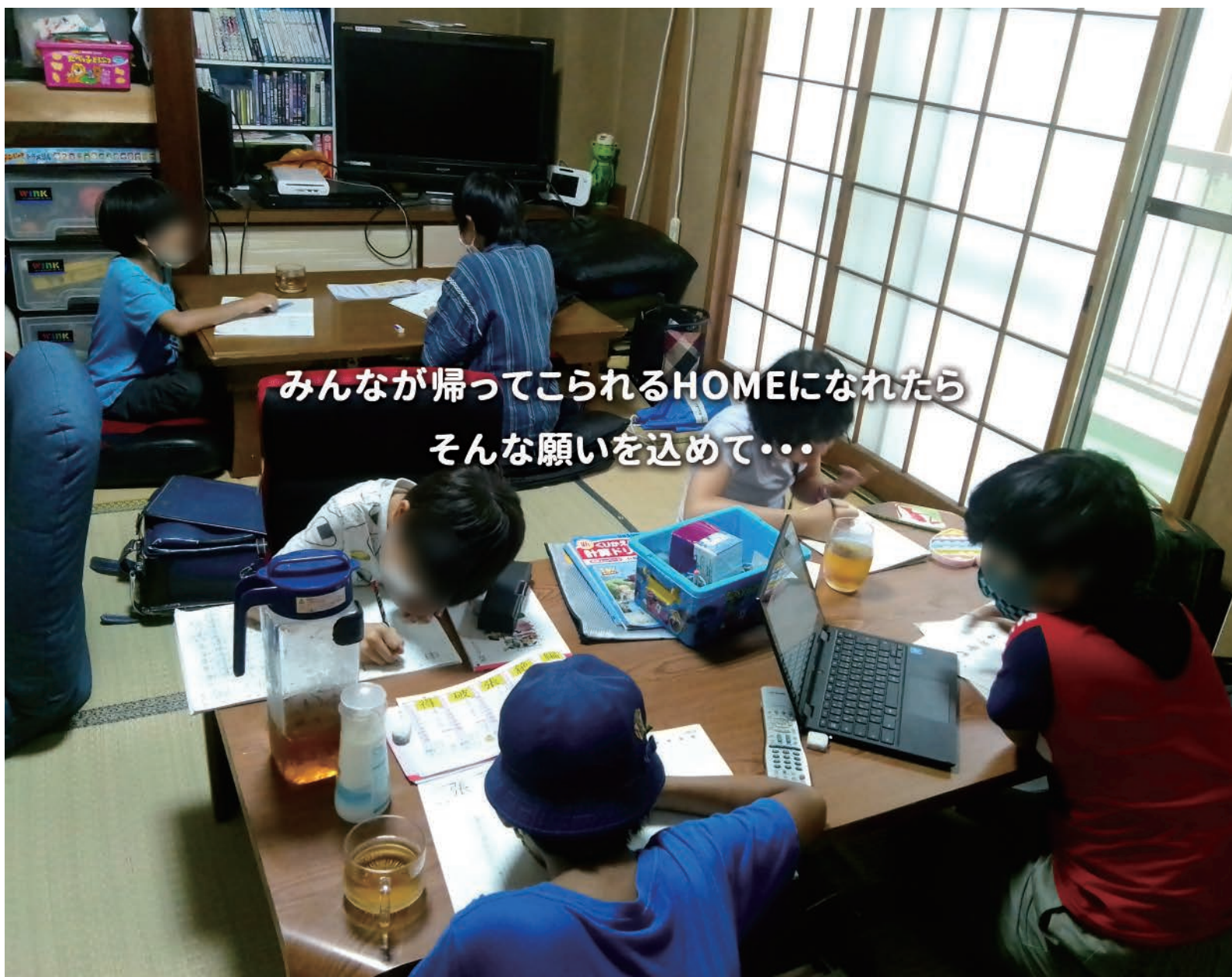
お蔭様で、WAKUWAKUホームも6年が経ちました。大きな事故やケガもなく、ここまでやって来れたことに感謝しております。そろそろマスクがはずせる日も近いようです。長かったコロナ禍の3年余り。しかし、子どもたちの成長はまったなし。来年もホームは続きます。

WAKUWAKUホーム 担当 天野敬子



※小学生3年生の子が描いた実際のマンガです





みんなが帰ってこられるHOMEになれば
そんな願いを込めて・・・

WAKUWAKUホームは、以下の助成を受けて運営しています

Supported by  日本 THE NIPPON
財団 FOUNDATION



団体名

住所

TEL

E-mail

Webサイト

認定特定非営利活動法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク

〒171-0014 東京都豊島区池袋三丁目52番21号

050-5526-1229 受付時間:10:00~17:00(土日祝日を除く)

info@toshimawakuwaku.com

<https://toshimawakuwaku.com>